

第2号

発行年月：2010年12月



日本医療ソーシャルワーク学会ニュース

＝2010年度 福岡大会＝

1. より望ましい社会への変革を目指して、さらなる実践を

日本医療ソーシャルワーク学会 会長 村上須賀子(兵庫大学)

ハイライト

日本医療ソーシャルワーク学会へと名称変更を行った記念すべき第1回大会が福岡にて行われました。

今号のニュースでは、福岡大会に参加された方々の声を中心にお知らせいたします。また、次回大会案内も記載しております。

目次

2010年度 福岡大会

1. 学会長あいさつ
2. 第1回大会報告
 - (1)大会長より
 - (2)大会事務局より
 - (3)参加者の声

事業報告

3. 新役員体制・組織
4. 学会ロゴマーク
5. 学会設立宣言
6. 宮崎口蹄疫募金
7. 研修会開催
8. 研究誌(創刊号)
9. 2011年度 兵庫大会
- ※会費納入のお知らせ
- 編集後記

私は医療ソーシャルワーカー職を愛しています。現場で、患者や家族から持ち込まれた問題を、その人達とともになんとか解決する方法はないか、少しでも改善できる手立ては無いものかと、毎日悪戦苦闘していた私が好きです。

この愛してやまないソーシャルワーカー職の現場を離れて大学に移るべきか悩んでいた時、院長に「我々医者が何処にいても医者であるようにあなたもずっと医療ソーシャルワーカーだろう」と背中を押されました。

そうだ、私は一生医療ソーシャルワーカーでいようと思い定めた時、支え、育ててくれた医療ソーシャルワーカーの仲間たちに役立つことはなんだろうかと考えました。12年前、当時、関西学院大学の故荒川義子先生に相談して「医療ソーシャルワーカーがお互いに支えあい、育ち合うこと」をコンセプトとした研究会を立ち上げました。50名ほどでスタートした、ささやかな研究会ですが「継続は力なり」と続けてまいりました。設立学会会場には、そうした、今まで研究会をともに継続させてくださったメンバーの方々も多く参加して頂き、感謝です。

学会設立記念にと児島美都子日本福祉大学名誉教授より、体調不良をおして寄せていただいたスピーチの「貧困問題を捉える視点。対応する支援を追及する視点」を貫くようにとのメッセージは、ピンリと私達の胸をうちました。また常にわれわれの応援団長を担ってくださっている京極高宣浴風会理事長は、医療ソーシャルワーカーの資格問題を整理し、明日へ繋いでくださいました。この両顧問の登壇によるあと押しで、日本医療ソーシャルワーク学会が力強く船出することが出来ました。

会場では「歴史的だ」とか「夢のような」の言葉が行き交いましたが、医療ソーシャルワーク



学会の誕生は歴史的な必然があったと、私は考えます。

我々医療ソーシャルワーカーはその、立場性を問われる危機を迎えています。それは財政難を理由とする医療改革、福祉改革が推し進められ、その歪みは「医療崩壊」「介護崩壊」として、日本の各地に広がり、医療ソーシャルワーカーが働く環境の厳しさが増してきているからです。業務のウエイトが退院援助のみに極端に偏り、しかもスピードが求められる状況に至っています。自己決定を尊重する専門職であると肝に銘じつつも患者さんの面談すらじっくり行えないくらい効率性が求められていると聞きます。厚生労働省が策定している「医療ソーシャルワーカー業務指針」に沿った実践すら困難となり、良心的な医療ソーシャルワーカーほどその悩みを深めています。「ソーシャルワーカーさん、あなたは何者であるか」を問われている時代だといえます。

それ由に学会設立大会テーマ「医療ソーシャルワークの原点に立ち戻って一貧困の支援者から学ぶ」を議論し、掘り下げる大会であったことは意義深いものでした。「貧困の支援者」たちの実践に裏打ちされた重い言葉を耳にし、議論する中で、われわれの立ち位置を明確にする実

践が求められていることを実感します。学会設立宣言に掲げた「より望ましい社会への変革者」たるソーシャルワーク実践が、今まさに求められています。

実践は「貧困の支援者」たちが語ってくれたように、とにかく一歩踏み出してみることに、粘り強く積み重ねていくことに尽きると思います。

大会直前に、広島であるアクションを起こしていました。原爆小頭症患者（近距離で胎齢早期に被爆したため複合的な障害を抱え、国に認定された人）と家族の会である「きのこ会」の支援を30年近く続けていますが、「援護すべき行政が、その責務をボランティアに押し付けているのではないかと」、「すべての原爆小頭症患者に対する専任の相談員として、国の責任で医療ソーシャルワーカー1名を配置してください。」との要望を広島県と広島市を通じて提出していました。

8月6日、平和祈念式典で菅直人首相あいさつの「母親の胎

内で被爆された方々やご家族のご要望を踏まえ、こうした方々への支援体制も強化します。」を耳にしたとき、私は照りつける平和公園会場で電撃が走る思いでした。要望は早くも国に届いたのです。直後の長妻厚生労働大臣の定例記者会見でも、総理から指示があったと「打てる施策があれば速やかに実行したい」と言明し、来年度概算要求に組み込まれました。前進への手ごたえがあります。

「一歩前進。」「半歩踏み出した。」・・・この学会がそうした医療ソーシャルワーク実践の交流の場になり、お互いに支えあい、社会的なアピールの発信源になるべく、さらに大きく成長させて行きましょう。

それは、「運動なくして福祉なし」と一貫して示して下さる児島美都子先生のあとに続いて「よりよい社会への変革者」としての医療ソーシャルワーカーの道をふみ固めて行くことになると思います。

2. 第1回「日本医療ソーシャルワーク学会」福岡大会 報告

①大会参加者 308名

②大会スケジュール

開催日：2010年7月31日（土）～8月1日（日）

会場：福岡医療福祉大学

大会テーマ：『医療ソーシャルワークの原点に立ち戻って ― 貧困への支援から学ぶ ―』

（1日目）2010年7月31日

学会設立記念スピーチ：『医療ソーシャルワークの原点』

児島 美都子（日本福祉大学名誉教授）

記念講演：『医療ソーシャルワークの今日的課題』

京極 高宣（社会福祉法人浴風会 理事長）

基調講演：『絆が人を生かすから ― 助けてと言える社会を求めて』

奥田 知志（ホームレス支援団体全国ネットワーク代表）

シンポジウム：『医療ソーシャルワークの原点に立ち戻って ― 貧困の支援から学ぶ ―』

コーディネーター 野上 美智子（大分県医療ソーシャルワーカー協会会長）

シンポジスト 有馬 泰治（千鳥橋病院 医師）

森 佳寿美（福祉型自立支援センターあおぞら 相談員）

松村 潔親（福岡市博多区保護第3課 保護係長）

懇親会

（2日目）2010年8月1日

〈ワークショップ〉

①「システムズアプローチの考え方と方法としてのコミュニケーション」

東 豊（神戸松蔭女子学院大学 人間科学部心理学科 教授）

②「ソーシャルワーカーの力量形成過程を考える：キャリアデザインの視点から」

横山 豊治（新潟医療福祉大学 社会福祉学部社会福祉学科 准教授）

③「生活保護 ― 要保護者の権利を守るために」

藤岡 良幸（福岡県京築保健福祉環境事務所 社会福祉課長）

〈分科会〉

- ④ 受診受療援助：コーディネーター 野田 雅美(産業医科大学病院)
シンポジスト 大塚 文(九州労災病院)
芝伐 達哉(大野浦病院)
柳迫 三寛(三原赤十字病院)
- ⑤ 退院支援：コーディネーター 若林 浩司(梶原病院)
シンポジスト 大石 美穂(佐賀県立病院 好生館)
嶋田さやか(長尾病院)
日隈 耕平(阿蘇立野病院)
下田 薫(国立佐賀病院)



(1) 第1回日本医療ソーシャルワーク学会 福岡大会を終えて

福岡大会大会長 山本真理子(飯塚記念病院)

とにかく暑かった今年の夏に全国から“第1回 日本医療ソーシャルワーク学会 福岡大会”のため遙々太宰府まで足を運んで頂き、無事大会を終えることができました。開催にあたり、多くの関係者の皆様より賜りましたご協力・ご支援に心から御礼申し上げます。

体調がすぐれない中で、学会設立記念スピーチを送って下さった日本福祉大学名誉教授の児島 美都子先生、そして記念講演をお引き受け下さった浴風会理事長の京極 高宣先生、おふたりの先生方の医療ソーシャルワーカーの過去から未来に向けたメッセージは、現場で悩みをかかえるワーカーにとってあたたかく勇気づけられるものでした。

ホームレス支援団体 全国ネットワーク代表の奥田 知志先生は、基調講演で現在の社会における人と人の“絆”の重要性についてお話し下さいました。先生の人を尊び、共に生きていく姿勢に、私たちは深い感銘をうけ、これからソーシャルワーカーとしてこの貧困問題にどう関わっていくかを考える大事



なききっかけを頂きました。

シンポジウム
やワークショップ
・分科会にお

きましては、ソーシャルワーク実践に関わる貴重なご報告を頂き、期待通り豊かな交流が生まれたと感じております。

実際にアンケートに寄せられた感想には、“感銘を受けた”“心に響いた”“勉強になった”などの感想が多く寄せられており、企画運営を行った実行委員にとりましては疲れも吹っ飛ば、何よりもうれしいことでした。

格差や貧困問題が深刻化する現代社会のなかで、私たち医療ソーシャルワーカーに今求められていることは、“人々のアドボカシー(権利擁護)”とそ



のために力を結集し豊かな未来をめざすことにであると学びました。この有意義な体験を今後どう実践につなげるかについては、来年の兵庫大会でそれぞれの実践を分かち合えることでしょう。最後に、今回の大会を縁の下から支えてくれた、福岡の実行委員と大会事務局の皆様にごころから感謝を申し上げます。

(2) 学会が終わって

福岡大会実行委員長 鬼木 浩之(福岡通信病院)

新聞の1面に「斉明天皇の墓が見つかった」というニュースが載っていた。斉明天皇は、天智天皇の母であり、飛鳥時代の女帝である。当時、朝鮮半島は激動期であり、唐と新羅の連合軍が百済を滅ぼそうとしていた。そこに、救援軍を派遣したのが斉明天皇であった。また、天皇自らが、はるばる太宰府まで行幸し、その指揮をとったと言われている。そして、当時の倭国(日本)は、

百済滅亡で多くの百済難民を受け入れるとともに、唐・新羅との対立を深めていった。その影響で急速に国家体制が整備され、天智天皇のときには法令が策定され、天武天皇のときは、律令国家の建設が急ピッチで進んだ。そして、701年の大宝律令制定により倭国から日本へと国号を変え、新国家が建設された。百済は滅亡することとなるが、倭国内部の危機感が日本という新しい国

家の建設をもたらしたそうだ。地元、太宰府の歴史には精通していると自負していたが、ニュースを読んで自分の無知さを恥じるようになった。

その太宰府で開催された第1回日本医療ソーシャルワーク学会で一番印象深かったのは奥田先生の講演である。先生に話していただいた「絆が人を生かすから-助けてと言える社会を求めて」の基調講演は、私たち医療ソーシャルワーカーにとって多くの示唆に富み、深く感銘を与えるものだった。福祉の原点である貧困問題を振り返り、ソーシャルワーク援助の思想と価値観を問い直すものでもあった。最近の若者は「助けて」と言えないという話だったが、私たち自身もそうではないだろうか。また、「赤の他人だから、真剣に関わるのだ」という言葉は日頃意識せずに行っている対人援助業務の基本を考え直させられて、新鮮に受け止めることができた。

先生からのメッセージは、現在の豊かだと言われる日本にはびこる「自己責任論」についての厳しい問いかけでもあった。ホームレスに自分から進んでなった人は少なく、社会が彼らを見捨てているのではないか。しかし、ホームレスをいじめる中学生のことを、そのホームレスが「帰る家がないのでいじめるの」「あの子どもたちも自分達と同じ境遇だ」と逆に心配しているエピソードを聞

かせてもらった。本来、私たちがソーシャルワーカーとして知っていなければならないことを次々と奥田先生から示され、知らないでは済まされない貧困問題の本質に触れたように思った。

この学会は、純粋に学びたい、聞きたいという自らの意思で参加されている方がほとんどだったと思う。300名を超える参加者の期待に十分応えることができたかはわからないが、少なくとも私たちの視野を広げる契機になったのではないだろうか。私は、ソーシャルワーカーとしての活力や成長していくための出会いや節目が必要であると感じるようになってきたところであった。まさに、それが今回の学会にあったように思う。これからも学会がこのような場を与えてくれて、そこに参加される方々が、元気になって現場で活躍されることを願っている。

最後に、いつのまにか実行委員長だと指名されて、なんとかやり終えることができたが、これも奥田先生や村上学会長をはじめ、何人もの齊明天皇のような実行力のある指導者のおかげだと感謝している。



(3) 日本医療ソーシャルワーク学会 福岡大会に参加して 参加者の声

山崎るり子(甲南病院)

7月31日から2日間、日本医療ソーシャルワーク学会の記念すべき第1回大会に参加させていただきました。今回の学会テーマは「医療ソーシャルワークの原点に立ち戻って～貧困への支援から学ぶ～」というもので、「貧困」を改めて考えることができました。貧困は社会問題だけで理解するものではなく、ひとりひとりの価値観や意識の問題でもあり、すごく深いものを秘めているんだなと感じました。

1日目は、楽しみにしていた児島美津子先生のお話が直接きけなかったのは残念でしたが、先生本人のお声でメッセージがあったのがとてもよかったです。

そして、なんといっても、北九州でホームレス支援をされており、キリスト教の牧師でもある奥田知志さんの基調講演「絆が人を生かすから」が、すばらしかったです。このお話だけで神戸から福岡まで来た甲斐がありました。

今、20～30代の若いホームレス生活者が増えているそうですが、彼らは住まいと職だけでなく、関係性(他者との絆)を失っており、また身内の支援は「愛している＝許せない」になってしまうという限界があり、そこに他人がかかわる必要性(他者性)がでてくるというお話でした。

また、奥田さんご自身のお話にも心うたれました。中学生の息子さんが、いじめで不登校になり、誰にも助けを求められないまま「死にたい」とノートに書くようになったこと。1～2年ほど学校にいけずどうしようもなかったところ、突然に本人が、とある沖縄の島に行きたいと言い出したこと。奥田さんは誰も知りあいのいないその島に「たすけてください」と頼むしかなかったこと。そうしたら全く知らないご夫婦が「うちにきたらいいよ」と手を上げてくださったこと。何度か下見に行ったあと、いよいよ息子さんがたったひとりで島に旅立つことになったとき、ずっと「俺は島人になるんや」と強がっていたのにいざ船がでるとき、ふいに「俺、やっていけるやろうか…」と不安げにもらしたこと。それをきいて奥さんが号泣したこと。息子をひとり島にやって、北九州



に戻る自分に対して「それでも親なのか」と自問自答したこと。その後、息子さんは無事に学校を卒業し、今ではその島のご主人に習った三線を、そのご主人と一緒に演奏してくれること…などを聴いているうちに涙がでてきました。

もしかしたら支援することよりも助けを求めることの方が難しいのではないかと。助けてと言える勇気が必要…そんなふうに考えさせられました。

あまりに感動したので、帰ってきて周囲にもその話をしていたら、なんと、私の友人のうちのひとりが奥田さんと親戚関係にあるということが判明し、不思議な縁を感じました。

2日目は3つのワークショップと2つの分科会が開催されました。ワークショップ形式の分科会は、研究会時代からこの学会の



特色であり、実践的なものとして参加者自身、得るものが多いと感じています。今回、私はワークショップ②の「ソーシャルワーカーの力量過程を考える～キャリアデザインの見点から」(横山先生)に参加しました。

ソーシャルワーカーになってからの自分をふりかえることにより、忘れていたたくさんのことを思い出しました。私を成長させてくださった何人もの患者さんをはじめ、尊敬する先輩や他職種の方との出会い、トラブルも含めて多くの出来事が思い出され、感謝の気持ちが湧いてきました。思いがけず初心にかえることができる2時間を過ごしました。また、この学会を通して、普段の仕事ではかかわることのない地域のワーカーともふれあえて刺激になりました。



今回は、申し込みが直前になってしまったにもかかわらず、事務局の方にあたたかく対応していただき、とてもうれしかったです。駅から会場までの送迎の方にもお世話になりました。今回のすばらしい大会をつくりあげていただいた、理事の方、実行委員会と事務局の方々に心よりお礼申し上げます。そして、この日本医療ソーシャルワーク学会が、これからも実践を大切にしたい、現任者の現任者による現任者のための学会であり続けていただければ願っています。次回の兵庫大会を楽しみにしています。ありがとうございました。

ワークショップ① 木村 透子(東京医科大学病院)

記念すべき第1回目の学会に参加させて頂いて、医療ソーシャルワーカーとは何かということを実感され、考えさせられた。京極先生の記念講演は残念ながら、全て聴くことができなかったが、改めてMSWの専門性とは何かを考える良い機会になった。

また基調講演ではホームレス支援団体全国ネットワーク代表の奥田先生にホームレス支援の現状と支援の視点などを伺うことができた。親元があってもなかなかヘルプを求められない若年のホームレスの現状は、ハウスレス(経済的・物理的困窮)のみならずホームレス(家庭に象徴される絆を失った姿)であること。そして絆を失くすということは自らの存在意義をも見失うことになること。自己責任と社会的責任は両輪であり、彼らを繋ぎとめ、絆を制度化していくことが社会の責任であるというお話が、奥田先生の温かいまなざしが感じられ、強く印象に残った。日頃の業務の中でホームレスの方の支援を行なう機会も比較的多いが、ホームレスのその後の人生にどこまで思いを馳せて支援をしているかと自分に問うてみたとき、「投げ渡し」ばかりではないかと恥づかしくなった。

シンポジウムでは医師、福祉型自立支援センターの相談員、

生活保護のケースワーカーとそれぞれの立場から貧困の支援についてお話し頂いた。他職種からみたMSWのイメージ、期待など普段なかなか聴くことができないご意見を忌憚なく頂き、客観的にMSWという業務を捉え直すことができた。

ワークショップは東 豊先生の『システムズアプローチの考え方と方法としてのコミュニケーション』に参加させて頂いた。まずシステムズアプローチの基本的な考え方を分かりやすい例を用いて、説明していただいた。人と人の関係性に着目し、個人を変えようとするのではなく、コミュニケーションの仕方を変えるよう働きかけることが大切であることを教えて頂いた。後半は事例を通じてグループワークを行い感想や疑問点を出し合った上で、東先生に疑問点を中心に解説していただいた。実際に東先生が関わった方の生の事例であり、アセスメントしつ



つ、意図的な関わりを展開していくアプローチに東先生が魔法使いのように思えた。仮説を以てアセスメントを行なうこと、相手の集団に溶け込むジョイニングという手法、そして対象者をポジティブリフレーミングすることによって関係性が変わるということが印象に残った。クライアントと向き合うとき、とすると問題ばかり強調して考えてしまうくらいがあるが、まず肯定的に捉えることの大切さを実感することができた。ワーク

ショップで体験したことを日々の支援に活かしたいと思う。

大会に参加することで自分がどうしてMSWになりたかったのかという原点に立ち返ることもできたように思う。この大会を支えて下さった方々全てに、また忙しい業務の中、大会に参加する機会を与えてくださった職場のスタッフにも感謝したい。ありがとうございました。

ワークショップ③ 田澤 貴至(城山病院)

生活保護の動向によると平成22年2月現在、生活保護の利用の数は被保護世帯約133万世帯、被保護人員は約184万人、保護率14%と、増加の一途を辿っています。「病気や障害を負って、働けなくなった」から「働けるが失業した」という理由が多くなっています。

藤岡先生は、手遅れになる前にセーフティネットを活用することを強調されていました。どうしようもなくなってからの生活保護申請が多くあり、自立していくためには相当の年月がかかります。その問題を解決するには、一時的に生活保護利用し、クライアントのエンパワメント(就労意欲等)を引き出し自立支援を行い援助するという、「プチ生活保護」の活用を勧めておられました。

今回のワークショップで生活保護の基本的部分から法的解釈といった詳細な部分まで説明していただきました。

また、これからのソーシャルワーカーとして取り組むべき内容として、法的根拠をもって代弁行為に取り組むことが重要であると指摘を受けました。

①事前相談

生活保護申請時に収入証明や預金残高の提示を求めることなどを指示していることが少なくない。

厚生労働省通知「保護の相談における窓口対応」では、申請の意思のある方への申請手続きへの援助指導を行うとともに、法律上認められた保護の申請権を侵害していると疑われるような行為自体も厳に慎むべきものとなっている。収入証明などは申請受理後にでき、事前相談時に指示する必要がない。

②保護申請

(問1)生活保護申請を口頭で行えるか？

答え：法施行規則第2条第1項では「保護開始又は保護の変更の申請は(中略)書面を提出し行わなければならない」と規定している。しかし、一般論として口頭での申請を認める余地はある。口頭で申請を行った場合でも改めて書面を提出し、提出できない場合は聴き取り後、書面作成してその内容を本人に説明した上で署名捺印を求めるなど、申請行為があったことを明らかにする。

(問2)ソーシャルワーカーは代理人として、生活保護申請できるのか？

答え：できない。本人の申請意思が重要で、代理人が判断すべきものではない。ソーシャルワーカーが申請者本人の意思で自ら記載した申請書を持参し、使者となることができる。

(問3)居住地のない者(ホームレス)からの保護申請はできるのか？

答え：住所がないことを理由に申請を拒むことはできない。「ホームレスに対する保護の適用」に従い保護施設等又は居宅においての保護を検討することになる。平成21年3月18日付厚生労働省社会・援護局保護課長通知によれば、居宅生活が可能と判断される者については、速やかにホームレス自立支援センターと連携し、低廉な賃貸住宅の物件情報を提供するなどの支援を行うことができる。

③不服申し立て制度について

原則2週間を経過した場合は却下と見なして不服申し立てができる。

ソーシャルワーカーが代理人となることも可能。

また、藤岡先生は我々医療ソーシャルワーカーに対して次のことを要望されました。



- ・ソーシャルワーカーは生活保護法の内容や法的解釈を理解し行動してほしい。
- ・生活保護手帳をしっかり読んで理解してから福祉事務所に相談してほしい。

現場ではなかなか生活保護手帳も紐解くことも少なく、貧困と向き合わなければならないソーシャルワーカーが生活保護について知識が浅いようではまだまだ、専門家とは言えないと反省しました。社会福祉の専門家として、貧困問題は原点であり、今回の学会で貧困という原点を学び直す機会を与えていただきました。学会は新しい知識を得るだけでなく、自分に何が足りないのかを気付かせてくれたと考えています。

分科会④ 野田 雅美(産業医科大学病院)

分科会④受診受療援助～受診受療援助とは～のコーディネーターを担当することとなり、日頃の業務を振り返る大変良い機会をいただきました。大会テーマ「医療ソーシャルワークの原点に立ち戻って」の下、受診受療援助の分科会を



どのように進めたら良いのかを思案する中で自分自身が「受診受療援助」を漠然と捉えていることに気がきました。そこで「誰のための受診受療援助なのか」、「なぜMSWが受診受療援助を行うのか」を現場のMSWの実践を通して明らかにしたいと考えました。実践を共有し、学び合うために、この分科会では3人のシンポジストから「急性期病院における受診受療援助」、「療養型病院における受診受療援助」、「回復期リハビリテーション病棟における受診受療援助」の事例を提供していただき、事例検討を軸に進めていきました。各事例は一般・急性期病院における受診受療援助として柳迫三寛氏(三原赤十字病院)から「外来におけるがん患者への受診受療援助」、療養型病院における受診受療援助として芝伐達哉氏(大野浦病院)から「急性期病院からの転院～長期療養後、在宅退院された事例～」、回復期リハビリテーション病棟における受診受療援助として大塚文氏(九州労災病院)から「自己決定に問題があり家族の支援が期待できないケース」を順に紹介していただき、1)所属する医療機関によってMSWの受診受療援助に違いがあるのか、2)MSWに共通する受診受療援助の視点は何かを論点に参加者の皆さんとディスカッションしました。シンポジスト三氏の発表はどれもMSWが

患者・家族に寄り添い、目の前の問題から将来の問題まで生活を見通し支援されている事例で、三氏が自己の所属する医療機関の役割と機能・院内スタッフの役割と機能・地域にある様々な社会資源の内容を十分に理解し、MSWの業務を進めていることが伝わってくる内容でした。決められた時間の中で一つ一つの事例について十分な質疑応答や議論までできなかったことが本当にもったいないと悔やまれる充実した事例でした。きっと参加者の皆さんがそれぞれ持ち帰り、実践のエネルギーとされたことと思います。フロアからは受診受療援助は治療そのものに関わる支援であり、医師との連携「ほうれんそう(報告・連絡・相談)」が重要であると的確な実践のヒントをいただきました。

不慣れなコーディネーターの拙い進行を皆さんで支えて下さり、無事に分科会を終了することができました。中でも人との絆・つながりを深く実感でき、何度も幸せな気持ちになったことは私の財産となりました。大会前に広島県内で記録的な豪雨が報道された時、柳迫、芝伐の両氏は大雨の被害が甚大であったのに九州の私たちを心配して下さるメールを下さいました。地元福岡で連日大会準備に奮闘した実行委員の皆さんの姿に福岡のMSWの明るく力強い未来を感じました。2日間とも晴天に恵まれ、猛暑を吹き飛ばす熱気溢れる大会に参加できたことを心から感謝しています。



分科会⑤ 山内めぐみ(けご病院)

この分科会では退院支援をテーマに佐賀県立病院好生館MSWの大石美穂さん、長尾病院MSWの嶋田さやかさん、阿蘇立野病院MSWの日隈耕平さん、国立佐賀病院MSWの下田薫さんが、急性期・回復期・維持期・周産期医療の立場からそれぞれ現状と課題を発表しました。

・急性期医療機関の退院支援

佐賀県立病院好生館の大石さんからは、病床数540床を超える地域の中核的な急性期病院だが、MSWはわずか3名体制であり、現状として相談依頼があったものしか対応できないこと、県内での受け入れ状況に差があり、中には受け入れ先が皆無なものもあり支援に苦慮されている現状が述べられました。今後の課題としてマンパワーの充実とMSWのスキルアップ、効果的なMSW配置の実現、他職種連携の必要性が挙げられました。地域とも顔の見える関係作り、連携ネットワークを築いていくことの必要性が挙げられました。

・クライアントに寄り添う退院支援とは

長尾病院の嶋田さんからは、MSW支援システムの再構築の取り組みが非常に印象的でした。再構築前は対象患者基準や支援の過程で他のスタッフとの役割が不明確であったため、介入が遅れたり患者・家族や院内スタッフからMSWの役割の理解が得られがたい問題が生じていたそうです。再構築として紹介医療機関からの情報提供書などの内容を元に「早期関与連絡票」を作成して病棟に提出し、MSW入院時インターン面接を実施されているとのことでした。入院当日から介入することで問題の早期把握や対応が可能になるだけでなく、患者様の不安や不満を早期に解消し安心感を保障できること、また入院に際しての家族の思いを知ることにより寄り添った支援ができることが事例をもとに挙げられました。

・維持期(療養病床)の立場から

阿蘇立野病院の日隈さんからは、南阿蘇地域における唯一の「病院」として、基幹病院や専門病院で治療を終えた後の亜急性期、回復期、維持期、終末期の医療に対応する中、リハビリや施設入所までの継続療養希望が多く、またガン等の終末期医療への対応依頼が増加していることが挙げられました。課題として在宅介護の基盤が弱いこと、夜間の訪問サービスがない等の後方支

援サービスが十分ではないこと、さらに山間部であるため冬季の退院支援が困難であることなど地域性に基づく点が多く挙げられました。

・社会的ハイリスク母子へのMSWの関わり

国立病院機構佐賀病院の下田さんからは、佐賀県周産期医療の中核病院として産科・小児科の養育支援を要する症例が増加傾向にあり、クライアントが抱える問題は複雑で医療機関のみで解決できないため、地域関係機関とケース検討会議を何度も開催されているとのことでした。また母親が安心して妊娠継続・出産・子育てできるように妊婦健診から支援は始まっている現状が挙げられました。

この分科会を通じて、退院支援には医療機関・地域性・クライアントの状況・介入のタイミングなど多様な側面で捉えていくことが大切なのだと感じました。そしてソーシャルワーカーはクライアントを生活者として支援していくこと

ができる、唯一の福祉職の専門家だと改めて考えさせられました。疾病や障害を負うだけではなく、貧困や社会的孤立という問題を抱えて、追い詰められて医療



にたどりついているクライアントが増加する中、疾病や障害をマイナスに捉えるのではなく、新たな関係性や人生の再構築をするためのための再生の場になればと感じています。よく英語のartという言葉は技術であったり、職人技と訳されることがあります。ソーシャルワーカーの技量もそういった意味でのartだと例えられることもありますが、1つ1つの援助の過程はクライアントや地域を巻き込んで一緒に創り上げていくものだと感じています。

また分科会の終盤にMSWの援助効果を数値化してエビデンスを出すことについても話題が及びました。これはMSWの目で見えた医療の場における生活問題を地域に発信していくことが学会設立宣言にもある「患者本位の立場から医療の場における生活問題を提起し発信すること」を実現することにも通じます。今大会に参加させて頂き、自らの日々の実践を振り返り、また多くの先輩方と触れ合うことができる貴重な経験をもつことができました。最後にコーディネーターの若林浩司さん、シンポジストの方々にお礼を申し上げ報告とさせていただきます。ありがとうございました。



＝事業報告＝

3. 新役員体制・組織

平成22年8月1日、第一回日本医療ソーシャルワーク学会通常総会を開催し、H22・23年度の役員と組織が承認されました。

顧問 児島 美都子(日本福祉大学)
顧問 京極 高宣 (浴風会病院・全国社会福祉協議会中央福祉学院)
顧問 スン・レイ・ブー(兵庫大学)

会長 村上 須賀子(兵庫大学)
副会長 大垣 京子 (福岡医療福祉大学)
副会長 奥村 晴彦 (大阪社会医療センター付属病院)
事務局長 阿比留 典子(済生会福岡総合病院)

教育研修	(担当三役：奥村 晴彦) 横山 豊治(新潟医療福祉大学) 野田 秀孝(富山大学) 竹内 一夫(平安女学院大学) 石橋 京子(岡山大学付属病院)	将来構想	村上 須賀子 大垣 京子 奥村 晴彦 阿比留 典子
学会誌	(担当三役：村上 須賀子) 黒岩 晴子(佛教大学)	総務	(担当三役：阿比留 典子) 森崎 千晴(あまのクリニック) 徳富 和恵(安芸太田病院) 中川 美幸(早良病院)
調査研究	(担当三役：大垣 京子) 加藤 由美(東北文化学園大学大学院)	地区担当	・北海道・東北・信越・北陸 ・関東 ・東海・中部・近畿 ・中国・四国 ・九州・沖縄
広報	(担当三役：阿比留 典子) 品田 雄市(東京医科大学病院) 中村 勇氣(早良病院)		横山 豊治 品田 雄市 黒岩 晴子 徳富 和恵 阿比留 典子
監事	住居 広士(県立広島大学) 山路 克文(皇學館大学)		

4. 日本医療ソーシャルワーク学会ロゴマーク

日本医療ソーシャルワーク学会の新しいシンボルとして、ロゴマークが決まりました。

基本構成としてはMedical Social WorkerのMSWとNipponのNを日の丸の赤を象徴的にロゴの真ん中へ配置して図案化し、平和の象徴である鳩が医療ソーシャルワーカーと同化して未来へ羽ばたく躍動感を表現し、また個別援助技術の面接をモチーフにして、二羽の鳩が向かい合い傾聴している姿勢を表しています。



日本医療ソーシャルワーク学会

5. 日本医療ソーシャルワーク学会設立宣言

2010年8月1日、第1回日本医療ソーシャルワーク学会総会にて、次の宣言文が承認されました。

日本医療ソーシャルワーク学会設立宣言

医療ソーシャルワーカーは、いつの時代でも一人ひとりの患者・家族の抱えている療養問題・生活問題に向き合い、患者・家族とともに悩みながら解決の道筋を求めてまいりました。今、私たち医療ソーシャルワーカーはその立場性を問われる危機を迎えています。

わが国では財政難を理由とし医療制度改革・社会福祉制度改革が推し進められ、その歪みは「医療崩壊」「介護崩壊」として日本全国に拡がり、医療現場の環境の厳しさが増してきています。在院日数の短縮化への攻勢はその加速度を増し、在宅医療を支える社会資源も未整理なまま、病院医療から在宅医療への移行が推進されています。

医療ソーシャルワーカーはこうした医療の潮流に影響され、業務のウエイトも退院援助のみに極端に偏り、しかもスピードが求められる状況に至っています。さらに、患者本位・自己決定を尊重する専門職であると肝に銘じつつも、患者やその家族の思いに添い続ける援助が困難になってきています。

厚生労働省が策定している「医療ソーシャルワーカー業務指針」すら臨床現場で実施しにくくなり、良心的な医療ソーシャルワーカーほどその実践上の悩みを深めています。

ここにいたり、私たちは『医療ソーシャルワークにアイデンティティをおく』日本医療ソーシャルワーク学会として、学会員の総意をもって以下の点を表明いたします。

- I. 患者本位の立場から、医療の場における生活問題を提起し発信することで、「より望ましい社会への変革者」たるソーシャルワーク実践を目指します。
- II. 医療ソーシャルワーカーが医療ソーシャルワーカーとして豊かな実践を展開できるよう、環境整備のための研究を進めます。
- III. 医療ソーシャルワーカーが「育ちあう」ことを基軸におき、自らの実践力を高める研修を重ねてゆきます。

日本医療ソーシャルワーク学会

2010年8月1日 日本医療ソーシャルワーク学会第1回福岡大会にて

6. 宮崎口蹄疫募金お礼

学会期間中、宮崎の口蹄疫被害による募金を皆様に募りました。二日間で42,417円のご協力を頂き、宮崎県医療ソーシャルワーカー協会を通して振込みを行いました。宮崎県医療ソーシャルワーカー協会会長および宮崎県知事より御礼状を頂きました。（原文をホームページに掲載しています）

7. 研修会の報告・案内

1. 関東地区ブロック研修（終了しました）

平成22年9月11日（土）10：00～16：00

ワークショップ：『困ったケースありますか？－ソリューション・フォーカスト・アプローチ（解決志向アプローチ）で目指す新しい解決－』

講師：大垣 京子（福岡医療福祉大学）

会場：東京医科大学病院 本館6階会議室

2. 九州・沖縄地区ブロック研修（終了しました）

平成22年12月18日（土）13：00～16：30

テーマ：『胃ろうと栄養管理について ― 生活支援の視点から ―』

講師：済生会福岡総合病院 内科 高橋 俊介先生 『胃ろうについて』

(社)福岡県栄養士会 副会長 石井 妙子先生 『栄養管理入門』

会場：済生会福岡総合病院 14階会議室

3. 学会特別企画 ― 宮崎県口蹄疫支援プログラム ―

テーマ：『コーディネート機能の基本を学び、一步踏み出そう!』

講師：橋本 康男(広島県総務局国際課長) 村上 須賀子(兵庫大学生涯福祉学部社会福祉学科教授)

開催日時：平成23年3月26日(土)13:00~18:00

会場：九州保健福祉大学総合医療専門学校(宮崎市瀬頭2-1-10)

定員：50名(先着順)

参加申込：平成23年3月10日までに別紙申込書(ホームページからもダウンロードできます)にてお申込ください

会費：日本医療ソーシャルワーク学会会員(正会員・準会員)3,000円、

九州医療ソーシャルワーカー協議会会員3,000円、左記以外5,000円

問合先：事務局(済生会福岡総合病院)

8. 研究誌(創刊号)のお知らせ

平成22年度の研究誌発行を予定しています。投稿規定・執筆規程につきましては、ホームページにてご確認ください。

(投稿締切：平成23年1月末日)

9. 2011年度 兵庫大会のお知らせ

開催日：2011年9月10日(土)~11日(日)

会場：兵庫大学(兵庫県加古川市平岡町新在家2301)

テーマ：(仮)紡ぎ手としての医療ソーシャルワーカー ―『孤立』からの連携支援の先にあるもの―

〈1日目〉記念講演：スン・レイ・ブー(兵庫大学 生涯福祉学部学部長)

基調講演：炭谷 茂(社会福祉法人恩賜財団 済生会 理事長)

分科会：実践報告・実践に基づく研究発表

〈2日目〉ワークショップ：(調整中)

詳細が決まり次第、ホームページに更新します。

会費納入のご案内

平成22年度の年会費につきまして、平成23年3月31日までに次の振込先へお願いいたします。

正会員 3,000円 ・ 準会員 2,000円 ・ 賛助会員 10,000円

郵便振替振込番号 01760-2-140617 日本医療ソーシャルワーク学会

お問い合わせ先：日本医療ソーシャルワーク学会 事務局 阿比留(済生会福岡総合病院)

※メールまたはFAXでのお問い合わせにご協力くださいますようお願いいたします

《編集後記》

「今年の夏は暑く、そして熱かった。」まずはその一言から編集後記を始めたいと思いました。日頃の業務に悩み、ジレンマを抱え、そしてそんなことを思う暇すらない中で、灼熱の福岡に集まった300人を超える参加者。目的は「自分たちは何者なのか？」そのことを改めて自分自身で問うことだったような気がします。そして多くの仲間に出会い、その出会いに感謝することだったのではないのでしょうか。私も大会準備から色々な出会いがありました。その出会いを通してまた一つ成長させられた気がします。この学会ニュース第2号を通して皆さんとの出会いと成長を共に喜び合えることに感謝です。 (広報：中村(早良病院))

発行：日本医療ソーシャルワーク学会
(The Japanese Society of Medical Social Work)
編集：日本医療ソーシャルワーク学会 広報担当
印刷：社会福祉法人 福岡コロニー
事務局：〒810-0001 福岡市中央区天神 1-3-46
済生会福岡総合病院 医療相談室
TEL：092-771-8151 FAX：092-716-0185
URL：<http://www.jsmsw.jp>
E-mail：jsmsw.secretariat@jsmsw.jp